

ビクティマ(犠牲者)を 名乗り出る

9月初の金曜日。会話の時間の研究発表の担当は私でした。実は、授業の初日の火曜日にローラがクラスみんなに問いかけました。「これから毎週金曜日は、あなたたちの中の代表が何かについて発表し、それについてディスカッションをする、という形で進めることにします。ついては最初の登壇者、ビクティマは誰になるかな?」

「ビクティマ」とはスペイン語で「犠牲者」の意。テーマを用意し準備・発表、みんなの質問や意見に対応する労苦をおもんばかってそう言ったのでしょう。教室内は急にシーンとなってしまいました。ローラと目をあわさないように、みんな下を向いています。「ハイ、勇気あるビクティマは?」。再びローラが問いかけてもシーン。無理もないかもしれません。スペイン語についてまだ自信もないところに加え、3日間という短期間に、テーマを選び準備するだけでも大変だからです。いつまで待ってもらちがあきそうにありません。そこで、思い切って自分が名乗り出ました。



「OK、じゃ私がビクティマになって、トップバッターを引き受けましょう」——これまでに3か月の教室経験があることと、かつて中南米で特派員をしていたときの体験をかみ合わせればなんとかなるだろうとの楽観と、クラスで最高齢であることがなんとなく義務感みたいなものを感じさせたからでした。

「年齢的には自分の息子や娘みたいな生徒仲間を、ローラの攻めから守ってあげなくてはいけない」と、妙な“人生の先輩”意識が出ていたとも言えます。

みんなはホッとしたようでした。続いて、「じゃあ、その次は自分が」とアルジェリアからのサミエルが名乗りを上げたのです。こちらの勢いに引っ張られたのかもしれない。



さて、テーマを何にするか——私は以前にローラが「日本からの学生は、なぜ教室でもあまり発言しようとしなくて、だから何を考えているのかわからない」と言うのを聞いていました。おしなべて、どの教師もそのように言います。そこで、なぜそうなのか、その背景に触れ、少しは反論も出来るようなテーマに決めました。「スペインと日本の文化・習慣の違いについて」——内容は、スペインに着いてからこれまでに体験し、見てきたことを中心に感想を述べ、日本との対比、背景について語るものです。大きく3本の柱を立てました。1. 時間に対する感覚の違い。2. しぐさの違い。3. 言葉の構成の違いと、そこから来る「謙譲」の文化について。これらの内容についてはこの連載の最初のころに紹介していますので、ここでは省略します。

ところで、教室でのこんな私の生き方が、クラス仲間からいろんな面で頼りにされるようになり、今度はみんなを自宅に招待して日本食を味わわせてあげる、といった方向にまで発展していきました。それは自分にとっても予期もしなかった展開でした。でもこのことは生涯忘れられない素晴らしい留学期間の思い出を作ってくれたのです。次号ではそのときのエピソードのいくつかを紹介しましょう。

清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家
世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。
東京都・昭島市在住
<http://homepage2.nifty.com/donky/>